



* 出会い *

歓声がエントランスから何度も響き渡る。

寒空の中、その声たちが釧路のまだ遠い春を告げるファンファーレにも聞こえた。

それもそうだ。

今日は僕が通う大学の合格発表の日。

定刻通りにエントランスに貼りだされた受験番号の羅列を、着慣れた制服に身を包んだ高校生たちが食い入るように見上げている。

残念ながら、そんなにレベルの高い大学ではないので落ちる者も少なく、ほとんどの受験生が歓喜の声を上げていた。友達と抱き合う子、親であろう大人とがっちり握手を交わす子、様々である。

僕はそんな喜びいっぱいの受験生の一人に声をかけた。

「合格おめでとう」いきなり他人に声をかけられて、一気に警戒の色を濃くする女子高校生。それでも僕は警戒心を少しでも解こうと優しい口調で語りかけた。「入学後はどこに住むつもりなの？」

まるでナンパだ。

「まだ…決めてませんけど」

「そりゃそうだよね、ところで学生寮に興味ある？」

「え？」

「実は合格発表に合わせて学生寮の案内をしてるんだよね」

「そうなんですか」

「うちは全国でも珍しく男女混合寮なんだ。あ、でもちゃんと男子棟と女子棟に分かれてるから安心して。で、もし少しでも興味があれば見に来てみない？」

「…遠慮します」

そう言い残して、彼女は去って行った。

「ヒデ、調子どう？」

「全然あかん」僕はお手上げのポーズをして、返事した。「寮ってあんまりイメージ良くないんちゃうか。大輔は？」

「一人案内までこじつけたけど、何かあんまりいい顔してなかったな」

「そっか」

今日は大学にとっては合格発表日。

一方僕ら寮生にとっては大切な新入生獲得日である。

僕たちが住む学生寮は全国でも珍しい「自治寮」という形態をとっている。通常は大学、または所属する学校法人が格安の賃料で住まいを提供し、寮母が学生の生活をある程度管理するものだ。

しかし自治寮の場合は、建設は学校法人が請け負うが賃料を徴収することはない。しかし水光

熱費や食堂を運営する食品会社に支払う代金を、寄宿する全学生で公平に負担する。これがいわゆる「寮費」に当たるわけだが、賃料そのものがないために、通常の学生寮に比べると格安だ。

ただし、あくまでも自治寮の場合は寄宿する学生の人数によって寮費は増減する。

頭数が多いほど一人当たりの負担は軽減し、少ないほど増加するのだ。

したがって、最低でも春に卒業する先輩たちと同程度か、それ以上の数の新入生を獲得できれば言うことはないのだ。

大輔とは入学当初よりとなりの部屋同士の関係で、今では一番の親友だ。そして彼は我らが自治寮の最高責任者である「寮長」という立場である。

今日は毎年恒例、寮長を中心とした新入学（予定）生勧誘大会。寮生を二手に分けて、ひとつのグループはとにかく合格者に声をかけて勧誘する役に、もう一方は寮内を案内する役に分担していた。

僕は、大輔とともに勧誘係。本当は気が進まないのだが、仕方ない、大輔たつての頼みだったし他の寮生もがんばっている。

「あの」

大輔とともに掲示版の前でたむろする高校生たちを合格者か否か見定めているその時、不意に後ろから声をかけられた。

振り向くと、そこには重そうなボストンバックを肩に食い込ませてこちらを見上げる少女がいた。

ここにいるのは大学の受験生かその家族、あるいは寮の勧誘係のみであるはずなので、「少女」と形容するのはいささか失礼かもしれない。しかし決して背が高い方ではない僕よりも頭一つ分低い身長と、ふんわりと可愛らしい童顔。

制服も着ていなかったもので、少なくとも高校生には見えなかった。

「この大学の寮の方ですか」

「あ、うん、そうだよ」僕は言うのを少しためらった。「学生寮の見学希望かな」

「はい」彼女も不安だったのであろう、すこしホッとした表情で言った。「一度見ておきたかったんで」

「そっか、じゃあ案内する？」

「はい、ぜひ」

僕は、大輔に目配せをした。

彼の眼は「逃がすな」と答えていた。

学生寮

「よくこんな重い荷物持ってきたね」

僕は彼女から受け取った荷物を肩にかけ直して言った。まだ雪の交じる悪路を、重そうな荷物を女性に持たせたまますすた歩けるほど野暮ではない。

「はい、結構連泊したんで」身軽になった彼女は口調も軽くなっていた。「大丈夫ですか？」

「君に持てたんだ、大丈夫だよ」

「ありがとうございます」

僕らの住む寮は、大学からは歩いて十分ほどの距離だ。その間に少しでも距離を縮めておいて、案内係にスムーズに引き渡そうと画策する。

「どこから来たの？」

「静岡からです」

「へえ、静岡。いいねえ、日本茶派の僕にとってはすごくうらやましい」

「ええ、逆にお茶しかないんですよね」

「僕は関西地方出身なんだ」

「ええ？そうなんですか」彼女はぱっと僕の方に向きなおした。「全然関西弁じゃないじゃないですか」

「初対面だからね」僕はそんな彼女の反応に苦笑いで返した。「普段はバリバリ関西弁」

「へえ、関西弁って聞いてみたいです。私の身の回りに関西弁の人っていないくて」

「入学してから僕のことを覚えていたら声かけて。その時は関西弁で話すよ」

初対面とは思えないほどに、彼女もよくしゃべる。

面白い子だなあ、と素直に思った。

それからしばらくお互いの故郷の話をしていると、すぐに寮に着いた。

年代物の建物は長年の風雨にさらされ、少しくすんだ色をしている。外観はあまり自慢できないので、僕はすぐに案内役へと彼女を引き継ぐべく足早に中へと彼女を誘った。

「見学希望者、連れて来ました」

「お、なかなか可愛い子じゃん」受付からのっそりと姿を現した彼は僕の一年先輩。「はりきっちゃうね」

よりもよってこの人か。

彼は見た目の良さとなめらかな話術で女子からの人気も高く、そして本人も手が早いことで有名だった。

この子も乗ってしまわなければいいが。

僕に対して見せた人懐っこさが、僕は心配になった。

しかし、先輩の口から出てきたのは意外な言葉だった。

「オレが案内したいところなんだけど、ちょっと案内役がほとんど出払っててさ。受付のオレがいなくなるのもまずいから、悪いけど連れて来たついでに案内もしてもらっていい？」

「え、僕がですか」

「ヒデ以外に誰がいるのさ」

ふと、後ろの彼女をうかがってみる。何のことかさっぱり分からない、というような笑顔で僕を見上げてきた。

「…わかりました」

「じゃ、よろしく」

そう言って先輩は、さっさと受付に引っ込んでいった。

「ま、そういうことだから」僕は彼女にスリッパを用意しながら言う。「中に入ってみようか」

「はい！」

まさかの同い年

簡単に自治寮の仕組みから部屋の内部の様子まで、解説と見学案内をしながら簡単に彼女に寮の説明をして回った。

この寮は居室の数の問題と、他学年との交流という理念のもと四人部屋というシステムを採用している。まず彼女はこの点に驚いていた。

大抵の学生はこのシステムを嫌がる。

せっかく親元を離れて暮らすのに、一人暮らしができないことに抵抗を覚えるのだ。かく言う僕も、そのシステムを知って寮には住みたくないと思っていた一人だった。ちなみに今もそうだけど。

しかし、金銭的な問題で親に半ば強制的に放り込まれたようなものだ。

きっと彼女も嫌がるだろうな、と思っていたのだが、彼女の感想は違った。

「何だか、すごく楽しそうですね」

「そうだね」僕は少し驚きながらも、心にもないことを言う。仕方ない、営業トークだ。「いつも誰かがいるから暇しなくていいし」

「私、できれば寮に入りたいなあ」

「入りなよ、待ってるから」

「でも…」その時初めて、彼女は少し陰るのある表情を見せる。「相談しないと」

「相談？」

「ええ、両親に」

「ああ」

彼女の表情が気にかかったが、親と相談するというのは当たり前だ。僕は納得した。

一通りの説明と案内を終え、僕たちは再び玄関まで戻ってきた。

「じゃあこれで寮の案内は終了。何かまだ聞きたい事とかあるかな」

「大丈夫です」彼女は僕から荷物を受け取り、深々と頭を下げる。「ありがとうございました」

「うん、静岡まで気をつけて」

「はい」

「じゃあ僕はここで」

「あ…」

彼女は急に何かを思い出したように振り返る。

「何、忘れ物？」

「はい…忘れ物というか」彼女ははにかみながら言う。「あの一、パシフィックホテルってどこにありますか？」

「え？」

「実は今日も釧路に泊まるんですが、今朝まで泊っていたホテルの部屋が続けてとれなくて…」なるほど。次に泊るホテルの場所が分からないわけか。

僕はできるだけ丁寧にそのホテルまでの道順を説明する。

「あ〜、大丈夫かなあ」困った顔をして彼女は頬に両手をあてた。「私、すごい方向音痴なんですよ。今朝泊っていたホテルの中でも迷っちゃって」

それを聞いて僕は一気に不安になった。

「じゃあヒデが連れてってやればいいじゃん」

いつの間にか受付から顔を出していた先輩が言う。

…聞いてたのか。

「それって…マズくないですか」

「何が？道がわからない、って言ってる子を放り出す方がマズいと思うけど？」

「そんなさらっといわないで下さいよ。この後また大学に戻るんですから」

「大輔にはオレから言っというてやるって。ほれ、さっさと行った行った」

彼にはもう何を言っても無駄らしい。決して男の僕から見ても悪い人ではないのだが、時々頑固なところがある。

「わかりましたよ…」僕はしぶしぶ引き受けた。「と、言うことだけどいい？」

「助かります！」

彼女の表情は一気に明るくなる。

そして、返した荷物は再び僕の肩に戻るようになった。

「やっぱり釧路って寒いですね」

彼女はぶるっと身震いしながら言った。

「そうだね、僕も初めて来たときは、ここで生きていけるんだろうかと思ったよ」

目的のホテルまではそんなに遠くはない。しかしこの季節に歩いて行くには少し億劫だった。ただ、寮からホテルまでの間にはバスなどの公共交通機関は通っていない。

必然的に歩くことになる。

「ああ、もう歳かな。高校生の時はスカート短くしても耐えられたのに」

「え、高校生の時は？」

「あ、言ってませんでしたか？」彼女は、しまったという顔をして、申し訳なさそうに言う。「実は私、二浪してるんですよ。だから今回が三回目の受験なんです」

「三回目？」僕は思わず足を止めた。そして思考を巡らせる。「ということは、もしかして僕と同年？」

「そうなんですか？」

彼女はぱあっと表情を明るくした。

「だってこの四月で僕は三回生になるわけだから…そうだよ、やっぱり同年だ」

「びっくり！すごい偶然ですね」

まさか同年だったとは。

僕は正直驚いた。だって、初めて見たときは高校生にすら見えなかったのだから。

「そうだ、私自己紹介もしてなかったですね」彼女はうきうきした様子で言った。「私、佐藤麻衣って言います」

「僕は川本秀和。友達はみんなヒデって呼ぶよ」

彼女につられて、僕も何だかうれしくなってきた。

こんな偶然、なかなかあるものじゃない。いや、ほぼ無いと言っていいだろう。

大学受験は相当難しい大学でない限りほとんどが現役生か、いっても一浪だろう。ウチの大学で二浪の末三回目の挑戦なんて聞いたことがない。

運命、とまでは言わないが、何かの縁を感じた。

それから僕たちは同世代ならではの話題で盛り上がり、一気に距離を近づけていった。

部屋番号は522号室

そうなる時の経つのは早いもので、あっという間に目的のホテルに到着した。

「じゃあ今度こそ僕はここで」

本当はもう少し麻衣と話していたかったのだけれどそうはいかない。受験生と在学生の立場をわきまえるべきだ。

それにいつまでも束縛するわけにもいかない。

しかし麻衣は、

「ええ、せっかくだから部屋まで来てせめてお茶だけでも飲んで行って下さい。寒い中ここまで迷惑をかけちゃったんですから」

と、あっさり僕の思いを揺らがす事を言う。

「迷惑だなんて思っていないよ」僕は正直に言った。「ただ、こっちこそこれ以上受験生の邪魔するわけにいかないかな、って」

「受験生、って言ったってもう試験は終わってますよ」

「でもさ…」

「どうせ私、この後することなくて暇なんです。寮と違って一人ぼっちですし。だから、ね」

懇願するように言う麻衣を見て、僕は迷った。

本当は僕だってもう少しくらいは麻衣と話していたかったのだから。

同い年、というだけではない。

「わかった」僕はいろんなものに負けた。「少し、くらいなら」

「よかったあ、じゃあさっそく行きましょう」

「うん」

僕は麻衣の荷物を背負い直した。

肩に食い込む重さが、急に心地よいものになった。

「部屋番号は…522号室ですね」

麻衣がフロントで受け取ったルームキーを見ながら言う。

「ということは5階か」

「そうですね」

私たちはエレベーターに乗り込んだ。目的の階のボタンを押すと、すぐに扉が閉まり上昇を始める。

「何だか不思議な感じですね」不意に麻衣が僕を見上げながら言う。「さっき初めて会ったばかりなのに、初めて、っていう気がしません」

「僕もおんなじこと思った」

「ホントですか？」

「ホントだよ。何だか昔からの友達に再会したみたい」

「わかります！確かにそんな感じ」

麻衣は可愛らしくころころと笑った。

到着した部屋は当然シングルサイズ。二人で入るには少し狭い印象を僕は受ける。

今日の部屋の主を差し置いてたった一つの椅子に座るのも気がひけたので、僕は麻衣の荷物を持ったまま、どうしていいか少し戸惑っていた。

「どうしたんですか、そんな動物園のくまさんみたいにうろうろして」

「いや、この荷物をどこに置けばいいかな、って」

「あ、ごめんなさい、気がつかなくて」麻衣は慌てて僕から荷物を受け取る。「狭いのでベッドでよければ座ってください」

「じゃあそうさせてもらうよ」

僕は身軽になった体をベッドに預けた。

心地よい疲労感が体にしみる。

「わぁ」窓の外に目をやった麻衣が急にはしゃいだ声を出した。「いい眺め」

「何が見えるの」

僕も興味をそそられ、麻衣の隣に立つ。

眼下に見えるそれは釧路川だった。

悠々と流れるその川は、少し視線をずらせば太平洋にそそいでいるのがよくわかる。そしてその河口には道内では有名な橋、「幣舞橋」が見える。

「釧路っていいところですね」

麻衣がしみじみと言う。

「あんまり遊んだりするところはないけどね」僕は苦笑い交じりに言った。「でもドライブして郊外まででるのもなかなかいいよ。牧場なんか広がっててさ、たくさんの牛が見れるんだ」

「車の免許持ってるんですか？」

「ううん、まだ。先輩に連れて行ってもらったんだ。でも僕も今教習所に通ってて、もうすぐ取れるよ」

「へえ、やっぱり大学生って大人ですね」

「何言ってるの、同い年でしょ」

「でも大学生ってうらやましい…」

「またまた。自分だって四月から大学生なんだから」

「そう…ですね」

傾きかけた陽のせいであろうか。

何だか急に、そう言った麻衣の背中が寂しげに見える。

理由はわからないが、明らかに麻衣のトーンが落ちていたので、僕は明るくふるまった。

「入学してきた頃には免許が取れてるはずだから、一緒にどこかドライブにでも行こうか。レンタカーだろうけど」

「いいですね、どんな所に連れて行ってくれますか？」

「うーん、僕も自分で運転しているんな所に行ってきたわけじゃないからなあ」僕は麻衣の顔を覗き込んだ。「佐藤さんがまた釧路に来るまでに考えておくよ」

「わかりました。いろんな所に連れて行って下さいね」

麻衣はそう言ってにっこりとほほ笑む。

その時、夕日にほんのりと朱に染められた彼女の笑顔にどきりとした。夕日にかたどられた長いまつげの影が、頬に落ちる。

可愛らしかった童顔が一瞬僕よりもいくつも年上の女性のように見えて、神々しさすら感じるようだった。

* 関西弁と敬語 *

「どうしたんですか」麻衣が僕の目の前で掌をひらひらさせる。「ぼーっとして」

その瞬間、僕ははっと我に帰った。慌てて顔を逸らす。

「いや、なんでもないよ」

「そうですか？」

「ああ」

「ふーん、まあいいです」そう言って麻衣はにっこり笑った。「それはそうと、私のこと『佐藤さん』じゃなくて麻衣でいいですよ。友達もみんな麻衣って呼びますし」

「え？」

話題が変わったことに対して内心僕は感謝したが、僕は少し戸惑った。

麻衣の申し出は正直うれしかったのだが、本当にいいのだろうか。

今ではそんなことはないのだが、僕は前まで異性を名前で呼ぶことに少しの抵抗を感じていた。それは異性と名前で呼び合うことは互いの距離感が特別な物のように思えたからだった。

大学に入ってからはその思いは瓦解したのだけれど、さすがに初対面の麻衣に対してはあまりになれなれしい感じがして、名前で呼ぶのは気が引けた。

「気にしなくていいですよ」狼狽する僕を見かねたのだろう、麻衣が再び口を開いた。「嫌ならいいですけど…」

そう言ってちょっと拗ねたような表情を見せる麻衣。

僕は意を決した。

「わかったよ…」僕は深呼吸した。「じゃあ…麻衣。これでいい？」

「いいですよ」

心なしか麻衣は嬉しそうだった。

僕も何だか頬が熱くなっていくのを感じる。

「なんだか、照れちゃいますね」

「そっちから言ってきたんじゃないか」僕はそう言って頬に手を当てる麻衣に苦笑い。「でも、フェアじゃないな」

麻衣は何の事だかさっぱりわからない顔をしている。

「敬語」僕はそんな麻衣の表情に思わずくすくす笑って言う。「同い年なんだから、かたやため口でかたや敬語って変じゃない？」

「えー、そんなことないですよ」麻衣はぷくっと頬を膨らませて返した。「だって私にとってヒデさんは先輩です」

何だかその表情が可愛らしくて、僕の中に悪戯心がのっそりと顔を上げた。

「まだ先輩後輩ちゃうやん」

「あ！」ぱあっと明るくなる麻衣の顔。「関西弁ですね！」

しまった、と思ったが、もうすでに時は遅い。

「ああ、そうだよ…そうやで」僕は観念した。「もうええわ、ずっと関西弁でしゃべったる」

「生の関西弁、初めて聞きました」

相変わらず麻衣は大きな目をキラキラさせている。

いまや関西弁はそんなに珍しいものではない。関西地方をピックアップしたテレビ番組も数多く放送されているし、ドラマや映画、マンガに小説など関西弁のキャラクターは氾濫している。

それでも静岡にいれば「生」の関西なまりは珍しくうつつたのだろう。

「で」僕の提案が流されているようだったので、仕切り直す。「敬語やめへんか。こっちも関西弁でいくし」

自分で言っているけども正当な取引には見えないのだが、そこは通しておきたい。現時点では先輩も後輩も無い同い年の女の子に、一人敬語で話しかけられるのは何だかむずがゆいものがある。

「うーん、わかりました」麻衣もとうとう観念したようだ。拗ねた表情で僕を見上げる。「でもいきなりは戸惑うので、少しずつ、ってことで」

「しゃーないな、それくらいは許したろ」

「ありがと」

にっ、と笑う麻衣を見て、どこが少しずつなんだろう、と思ったのだがあえて突っ込むことはやめておいた。

「そう言えば」僕は麻衣が淹れてくれた煎茶をすすりながら切り出した。「この後の予定は。なんかすることあるん？」

「特に考えてないなあ」

一方の麻衣はコーヒーだ。

僕がコーヒーが苦手であることを告げると、「子どもだなあ」なんて笑いながら麻衣はコーヒーを選択した。もともとこの部屋には今日一泊だけの予定だということで、備え付けの飲み物は煎茶とコーヒーひとつずつしかなかった。

麻衣はもともとコーヒー好きだったらしく、嗜好が一致しただけなのに。

「あ」麻衣はコーヒーを机において、ぽん、と手を叩く。「うちにお土産買いたいなあ」

「お土産かあ」僕は嗜好を巡らした。「ここからちょっと歩いた所にお土産屋さんがたくさん入っとる施設があるで」

「そこ、行きたい」

「ええで、連れてったる」

僕は座っていたシングルベッドから立ち上がって、さっそくコートに手を伸ばした。

「やったあ」麻衣も椅子から弾かれるように立ち上がった。「ありがと」

おススメはサーモン

ホテルから徒歩五分ほどの所にあるその施設は、M00（ムー）という愛称で釧路市民に親しまれている、市場と土産屋が混在した商業施設である。

釧路川と太平洋が会おうその場所は、よくカップルが散策している。

いつかは彼女と、と思っていたが、まさか初対面の受験生と歩くことになるとは夢にも思っていなかった。

「たくさん買った」

となりで多くの袋をぶら下げている麻衣は嬉しそうだった。北海道土産として有名な「白い恋人」から、よくわからないご当地物のキーホルダーまで。さすがにカニを買った時には驚いた。

。

「どうやって持って帰るん？」僕は笑うしかなかった。「特にカニとか」

「ホテルから送っちゃうよ」麻衣は荷物を高らかに持ちあげた。「さすがに静岡まで持って帰るの大変だもん」

「そりゃそうやんな」

「そうだよー」

そう言うと、急に何かに導かれるように麻衣は河畔に歩を進めていった。急に離れていく麻衣を不思議に思いながら、僕も彼女に従ってついていく。

麻衣は河畔の手すりから身を乗り出すように何かを眺めていた。

「どうしたん？」

「夕日がきれい…」

麻衣が見つめるその方角には、今まさに太平洋に沈まんとする太陽があった。ホテルにいた時から傾きかけていた陽は、いつの間にかその姿の半分を隠し、街全体をまるで茜色の水彩絵の具で塗ったかのように染め上げていた。しかしながら、ふと夕日と反対方向の空を見上げると、夜空が広がりつつある。

まるで昼と夜との境界線のような空だった。

「釧路って、やっぱりいいところだね」

夕日を眺めながら、麻衣の背中が僕にぼつりつつぶやく。

「何ゆーてんの、四月からは釧路来るやん」

「そうだね」麻衣は顔だけ僕に向けてにかっ、と笑う。「そうだった」

「忘れんなよ、そんな大事なこと」

僕もにっ、っと笑い返して言った。

「ねえ、おなかすかない？」

ホテルのフロントで宅急便の手続きを終えると、麻衣が切り出してきた。

なんていきなり、とも思ったが、時計は確かにちょうどいい時間を示していた。

「どこかおいしい所連れてってー」

「はい？」

まさかそんなことを麻衣が言い出すとは思いませんでした。さすがに僕はここでお暇しようかと思っていたのだから。

いくらなんでも、これ以上はまずい。

ここまでに何度自問したことか。

麻衣の「受験生」という立場が僕を相変わらず迷わせていた。それがただの受験生であれば僕だって迷うことはない。「もう帰るよ、お休み」と一言言って立ち去ればいいのだから。しかし、今の僕にはそれはできない。そう言いたくない自分があるのだ。

そんな僕の迷いはお構いなしに、麻衣は子どものように僕に訴える。

「おなかすいたなあ、釧路らしいもの何か食べたいなあ」

仕方ない、今日はとことん付き合おう。

僕は自分に言い訳をした。

「じゃあ回転寿司なんかどう？釧路の魚はめっちゃうまいんやで」

「じゃあそれで！」

麻衣はガッツポーズで応えた。

それから僕たちは麻衣の荷物を部屋に置き、釧路では有名な回転寿司店「なごやか亭」に向かった。

その店はいわゆる「デカネタ」をイチオシしていて、シャリの部分が見えないほどに大きくカットされたネタが魅力的である。また大学生の懐にも優しく、同程度のものを出す寿司屋の中では比較的廉価であった。

「わー、すごーい」おしぼりで手を拭きながら、麻衣は目を輝かせる。「おいしそー！」

「せやろー」自分もただの客なのだが、まるで自分の店のように僕は自慢する。「どれもうまいけど、特にサーモンがオススメや」

「ホタテとかカニ、イクラじゃなくて？」

「うん。そういう『いかにも北海道！』っていうのもうまいけど、釧路のサーモンは絶品や。脂の乗りもちょうどよくって、サーモンの見方変わるで」

「へえ。じゃあ私もサーモンにしよっと」

そう言って、麻衣は早速目の前に流れて来たサーモンの皿を手取る。

「お先に〜」

「どうぞ」

「いっただっきまーす」

口に入れて咀嚼を始めると、途端に麻衣の目がとろんと閉じられた。

「どや？」

「…っおいっしーい！」目はそのまま、口をもぐもぐさせて僕の方に顔を向けた。「何これ、信じられない！サーモンってこんなにおいしいものだったの？」

「そうや、僕も釧路に来て初めてサーモンの本当のうまさを知ったわ」

「感動！」

「気に入ってもらえて良かった」

「気に入ったなんてものじゃないよー」

結局、麻衣は全部で八皿を平らげ、そのうち四皿はサーモンだった。

泊まっていきなよ

「おなかいっぱい。歩きたくなーい」

「そんなこと言わんと、寒いからはよ帰るで」

「えー、鬼ー悪魔ー」

僕と麻衣は食後の運動がてら歩いて帰ることにした。ところが、すぐに寒さと満腹感で麻衣は音をあげだしたのだった。

「そんなこと言うんやったら、麻衣のことおいて帰るからな」僕はにやりと笑って見せた。「方向音痴の麻衣が一人で帰れんのかなー」

「えー、ひっどーい」麻衣が頬を膨らませて言う。「ホントの鬼だ」

そう言いながらも麻衣はにこにこ笑いながら僕のとなりで歩を進める。

もう三月だというのに僕たちの吐く息は白く、まるでマンガの吹き出しのように言葉とともに目の前を漂い後方へと流れていった。

「釧路って本当に寒いんだね」麻衣はその白い息で両手を暖めながらつぶやく。「静岡じゃ三月に息が白いなんて考えられないよ」

「僕も初めはびっくりした。一番びっくりしたんが、ゴールデンウィークに雪が降ったことかなあ」

「ええ？」

「まるで日本ちゃうみたいやろ」

「うんうん」

そんな他愛のない話を続けながら歩いていると、やがて寮のシルエットが見えてくる。なごやか亭と、麻衣が今日泊るパシフィックホテルのちょうど中間地点に寮があるのだ。

「あれ、来たときは気づかなかった」

「ええ？だいたい寮からホテルに送って行った道に戻ってきたんやで」

「方向音痴に加えて物覚えも悪いときたか、私」

「まあ、受験の時にも来てるやろうけど」僕は立ち止まる。「寮まで見に来たんは初めてやろ」

「そうなんだけどね」麻衣も僕にならって立ち止まった。「軽くショックだよお」

寮のシルエットの遥か彼方の空には星が瞬いている。

関西地方では見たことのないほどの数だ。

世界的にも有名な湿原が広がり、太平洋に面しているこの街はそれほど空気が澄んでいるのだろう。また、この辺りは街灯も少ないため、星達がまるで夜空の主役であるかのように振舞っていた。

春先のこんな寒い日には、僕らを包む空気も凜としていて心地いい。

麻衣も僕の視線の先に目を移した。

「…きれい」

「ああ、そやろ」

「ねえ、ヒデさん」

「ん？」

「今日は本当にありがとう。釧路に来てとってもいい思い出ができた」

「なんや、もう二度と来ないような言い方やな」

「ううん」麻衣は頭を振った。「そんなことはないよ。でもね」

「でも？」

「せっかくだから、もう少し一緒にいたいな。それとも、もう寮に帰っちゃう？」

僕は、はっとして麻衣に向き直った。

麻衣はまっすぐに僕を見上げている。

彼女も、今の僕と同じ気持ちだったのだ。

僕と麻衣は再び彼女の部屋にいた。

夕方とは逆で僕が椅子に、麻衣がベッドに腰をおろしている。

僕たちの間にある小さな丸いテーブルには、途中のコンビニエンスストアで買ってきた少々のアルコール。

麻衣がチューハイを選んで取り出したときに、「補導されるんちゃうか」と茶化すと、「バカにして」と顔を膨らませた。

結局僕たちは日付が変わるころまで話していた。僕からは大学生活の楽しみや、地元の話。麻衣からは浪人生の苦悩ややはり地元の話など、話題は尽きることが無い。

「たばこ」麻衣が僕のジャケットの胸ポケットを指さす。「吸うんでしょ」

「あ、ばれてた？」

「今まで我慢してたの？」

「まあね」僕はたばこの箱が隠れるまで、ぐっとポケットの奥に押し込む。「嫌がる女の子多いからな。それに麻衣の部屋で吸うわけにもいかへんし。服に臭い付いてまうやんか」

「気にしなくていいのに」そう言って、麻衣はそっと備え付けのグレーの灰皿を差した。「どうぞ。今まで我慢してくれてたんだね」

「ホンマにええのん？」

「いいよ。それに男の人のたばこの匂いって嫌いじゃないし」

「…じゃ、遠慮なく」

僕は押し込んだたばこを取り出し、火をつけた。たばこの先から白い煙が糸状に昇る。

麻衣はそんな僕の様子をじっと見つめていた。

「そんなに見つめられたら落ちつかへんよ」

「あ、ごめん」麻衣の視線が僕の顔に戻された。「やっぱり大人だなあ、って思って」

「たばこが？」

「ううん、ヒデさんが」

「そう？」まっすぐ見つめてくる麻衣の瞳にどきりとしながら、何とか答えた。「中身はめっちゃ子どもやで」

そう言うと、麻衣はくすくす笑う。

「そうかもね」

いよいよ日付が変わり、お酒も回ってきた。

アルコールに強くない僕は少しの眠気に襲われ、思わず欠伸を漏らす。

「眠くなってきた？」

麻衣が心配そうに僕を覗き込む。

「ん、ああ、もともとお酒は弱いからね」

「そうなんだ、勝手に強そうなんて思った」

「よう言われる」僕はわざとらしく肩を落として見せた。「そういう見た目してんのかな。嫌いじゃないけど、すぐにフラフラになってまうねん」

「やっぱり子どもじゃん」

「ひどいなあ」

そして二人で笑う。

何故だろう、僕と麻衣は出会ってから一日も時間が過ぎていないのに、本当に麻衣のことを昔から知っているようだった。そんな居心地の良さを感じる。

あまりにも自然なのだ。

明日も明後日も、そしてこれかもずっと、こうして麻衣と笑いあう毎日が待っているような、そんな気さえしてくる。

僕の入学当初から麻衣は釧路にいて、ともに授業を受け、時々ともに食事に出かけ、そして明日の夜もこうして何気ない話で盛り上がるような。

麻衣がチューハイに口を付ける。

彼女は缶の飲料を飲む時、すっと目を閉じる癖があるらしい。

それが妙に色っぽく見えた。

そっと話された口から、軽い吐息とともにあまりに唐突な言葉が紡ぎだされた。

「泊っていきなよ」

僕は持っていたたばこを落としそうになり、慌ててくわえ直した。

「な、何ゆーてるん」

「私がそこのソファで寝るから。ヒデさんは今日私にたくさん付き合ってくれたんだから、ベッド使いなよ」

「いやいや、そうゆうことちゃうねん」僕は動揺を隠せている自信がなかった。「レディーが真顔で何ゆーてんねん」

「だって真剣に言ってるもん」

そう言って麻衣はじっと僕を見つめる。その視線の強さは冗談を言っているそれではなかった。

僕にだって女性と一夜を共にした経験くらいある。

しかしその経験は全て、いわゆる「彼女」という存在と、である。今でこそそんな存在は僕にはいないが。

ただ初対面の女性、しかも受験生となんて僕の経験には一切ない。

体を重ねることなどはないだろうが、僕の中には麻衣と一晩過ごす、なんて選択肢は存在し

なかった。

「いや、さすがに帰るよ」僕は正直、後ろ髪引かれる思いだったが最低限の良識を選択した。「寮の人にも不審がられるし。特にさっきの先輩。変な想像されてまう」

「変な想像って？」

麻衣はにやりと不敵な笑みを浮かべる。

僕は余計なことを言ってしまった事を後悔した。

「え、いや…その」

「エッチなこと考えてたんでしょー」

「そんなことないわい」

「嘘ばかり。だいたいそんなことになるわけないんだから、気にしなくていいのに」

「それでも今日は帰るよ。麻衣をここに送っていく、って出てきてから一度も寮に帰ってへんし」

「えー」麻衣はふてくされる。「残念」

「それよりさ」麻衣があきらめてくれたことに安心し、僕は話題を変えた。「明日何時に出るん？見送りに来るよ」

本当は明日も寮の勧誘があるのだが、少し抜けるくらいは許されるだろう。

「んー、お昼前くらいに出るよ。釧路駅から電車に乗って新千歳空港に行くから」

「釧路空港ちゃうんや？」

「うん、釧路空港からだとまっすぐ静岡の方に行けなくて。新千歳からの便にしちゃった」

「そっか。じゃあ明日の十時にロビーに迎えに来るわ。そんで釧路駅まで送ってく」

「ええ、悪いよそんなの」

「ええから。僕がそうしたいねん」

これは僕の最大限の告白であった。

本当はいつまでも麻衣と話していたい。麻衣と一緒にいたい。

しかし一晩を共にするのは気がひけたし、きっとこのままここにいれば一晩中話しこむことになるだろう。それは明日静岡までの長旅が待っている麻衣のことを考えると出来なかった。

それでも、明日静岡に帰ってしまう麻衣とはもう少しだけでも一緒にいる時間が欲しかった。たとえ春になれば麻衣は当たり前この街にいるであろう、ということを考えても、だ。

明日も、麻衣と一緒にいたい。

「じゃあお願いしよっかな」麻衣はにっこり少し恥ずかしそうに微笑む。「このままバイバイなんて、ちょっぴり寂しいし」

ごめんね。

ほどなくして、僕はホテルを後にした。

ふと522号室を見上げると、麻衣が窓から手を振っていた。僕も軽く手を挙げてそれに応え、寮へと体を向ける。

振り返ってみると、何とも不思議な一日だった。

僕からではなく、麻衣から声をかけて来た。

そしてまさかの同い年。

受験生と話が盛り上がり、ホテルの部屋まで上がりこみ、夕食を共にした。

街の明かりが静かに落とされ、こんなに星が瞬くまで共に過ごした。

明日は静岡まで帰る麻衣を見送る約束。

なんだか、春からの大学生活が待ち遠しくなっている自分がいた。

翌朝、約束の十時よりも二十分も早くホテルのロビーに着いてしまった。

いつもよりも早く目覚めてしまい、寮にいても手持無沙汰だったのだ。

寝起きにいつも通りたばこに火をつけてみても、あっという間に吸い終わり、それをもみ消していた。それからは何をしても落ち着かなかった。

春になってまた麻衣と過ごせるようになったら、どこに行こう。どこに連れて行こう。まずは生活用品をそろえなくちゃならないかな。いくら寮生活であっても最低限の生活用品は必要だし、もし一人暮らしならなおさらだ。

落ち着いたら本当にレンタカーでも借りて、道東の自然巡りでもしようかな。幸い見る所はたくさんある。

そんな想像を頭の中で繰り広げていると、やがて麻衣がもはや見なれたバッグを肩から提げて、エレベーターから降りて来た。

「おはよう、早いね」

あれから数時間しか経っていないのに、麻衣の笑顔を見ることができるのが嬉しかった。ふんわり柔らかく、幼さの残ったその笑顔に少しでも早く会いたかった。

「早くに起きてもーて」

僕は半分の嘘をつく。

「えー、私はぎりぎりまで起きれなかったよ」

確かに麻衣は少し眠そうだった。

ほんのわずかに髪が湿って見えるのは、出てくる直前までシャワーでも浴びていたのだろう。

「じゃあ、釧路駅行くで」

そう言って僕は当然のように麻衣のバッグを持とうと手を伸ばす。

「今日はいいよ」すると麻衣は笑顔で拒んだ。「ありがとね」

「どうして？」

「だってなんだか悪いもん。昨日は受験生と寮の案内役、それとも後輩と先輩だったかもしれな

いけど、今日は違うと思うんだ」

僕は麻衣が言わんとしている事をつかめないでいた。

「今日は友達として見送ってくれるんでしょ？」

釧路発、札幌新千歳方面行きの特急列車「スーパーおおぞら」がその車体に乗客を受け入れるまでに、少しばかり時間があつた。

幸い釧路駅の駅舎には喫茶店がいくつか入っていたので、僕と麻衣はその中の比較的客の少ない店を選んで入った。

タイムリミットを知っている僕たちは、時間を惜しむように話し続けた。マスターが淹れてくれたコーヒーとグリーンティーは結局香ばしい湯気を立てるだけで、一度も口を付けられることはなかった。

時計は確実に時を刻んでいく。

それとともに、早口になっていく僕と麻衣。

これが最後の別れではないと、少なくとも僕は知っているのに。

知っているつもりなのに。

その時、館内放送が乗車時刻が迫っていることを告げた。

僕たちはお互いに視線を交わす。

そして、麻衣がふっと笑った。

「じゃあ、もう行くね」

僕は急に得体の知れない不安感に襲われた。

喉元にまで、行くな、という言葉が迫ってきている。

テーブルに置かれた伝票を麻衣がさっとさらった。

「ここは私が払うね」

「え？」

「いいから」その口調には有無を言わせない雰囲気があつた。「今までたくさんお世話になつたお礼だよ」

「そんな、ここは先輩が」

僕は食い下がったが、麻衣は頑として聞き入れない。

そしてあのふんわりとした笑顔で言う。

「言ったでしょ。今日は友達として、だって」

札幌方面行の列車はいつもこんでいる。

今日も例にもれずなかなかの人出だ。

麻衣は小さな体でバッグを抱え、負けじと乗車し、自分の指定席へと荷物をおさめはじめた。

僕はそんな麻衣が頼りなさげで、思わず車外から麻衣の姿を窓ガラス越しに追う。しかし、荷物をおさめ終わった麻衣は僕の姿を認めると、乗降口の方を指差した。ゆっくり大きく口が僕に

向けて動かされる。

「来て」

僕はホームの端に、麻衣は列車の乗降口に立っている。

「ごめんね。私、ヒデさんに謝らなくちゃいけないことがあるの」

「え、なんや？」

麻衣は俯いた。

そして深呼吸をして、再び顔を上げる。

その瞬間、一筋の涙が麻衣の頬を伝った。

「ホントはね、四月から釧路には来れないの」

「え？」

僕は混乱した。

「実は今回もダメだったんだ。今年も大学生にはなれないの。だから…もう会えない」

一瞬麻衣が何を言っているのかわからなかった。

「そんな…じゃあ、なんで寮まで？」

「最後に四月から生活するかもしれなかった寮を見ておきたかったの。目に、焼き付けておきたかったの。でもどうしていいかわからなかったから、ヒデさんに声をかけて…」

「そう言うことやったんか…時々様子がおかしかったんは。…でも、また来年受験したらええやん。何度でも挑戦したらええやん」

「もうダメなの。これが最後のチャンスだ、って、お父さんと約束してて」

「一緒にドライブ行くってゆうたやんか」

「ごめんね。…ホントにごめん」

「…そんな」

「ヒデさん。ヒデさんと過ごした時間、すっごく楽しかった。いろいろ連れて行ってくれてありがとう」

そんなこと言うなよ、もっとたくさんいろんな所に連れていきたかったんだ。

もっとたくさん、君と過ごしたかったんだ。

「最後に、最高の釧路の思い出を、ありがと」

最後、なんて言うなよ。

麻衣は涙でくしゃくしゃの笑顔で言う。

その時、発車を告げるアナウンスとベルがホームに響き渡る。

「じゃあ、もう、行くね」

まだ始まったばかりじゃないか。

行くなよ…行くなよ、行くなよ！

「行くなよ！」

僕が出した初めての大声に驚いたような表情の麻衣と僕の間、扉が閉まる。

麻衣の口が震えながら、何かをつぶやいている。

しかし何を言っているのか聞こえるはずもなく、僕の滲んだ視界では読み取ることさえでき

なかった。

車掌が吹く笛の合図で、列車は轟音とともにゆっくりと動き出す。

まるで名残を惜しむかのように。

安いドラマなどでは主人公は列車を追うのだろうが、僕にはできなかった。その場から一步も動けず、麻衣のいる乗降口が僕の視線と平行になって麻衣が見えなくなるまで見送っていた。

麻衣がいなくなった後の日々は、驚くほどに何も変わらず過ぎていった。

四月になり、僕はめでたく三回生へと進級した。

そして寮にも多くの新入生が入ってきた。その人数は僕たちの期待以上で、卒業生の数よりも多く、在寮生たちは自分達の負担が軽くなることを喜ぶ。

しかし、そこに麻衣はいなかった。

当たり前とはいえ、ほんの少しの期待はあっさり打ち砕かれた。

当然、大学の新生名簿にも「佐藤麻衣」の名は無かった。

再び自月、僕は四回生になった。

やはり、大学に麻衣の姿はない。

その年、小学校の教師になるための採用試験を受けた。

自分なりの努力の成果か、無事に合格通知を受け取る。

また四月、僕は市内の小学校に赴任した。

その年の半ば、新聞に「釧路パシフィックホテル 経営不振により閉館」という記事を見つけた。

仕事を終えて、僕は車に乗ってパシフィックホテルへと向かった。

麻衣と何度かくぐったあのエントランスにはベニヤ板が張られ、何人もの入館を拒んでいた。

僕は車から降りて、522号室を見上げた。

客室の窓という窓のカーテンが閉められていたが、522号室だけは半分ほど隙間があいている。

ちょうどそこに月の明かりが反射して、まるで522号室にはまだ明かりがともっているようにも見えた。

それから何年もの時が過ぎていったが、ホテルはいまだに取り壊されることも無く、相変わらず522号室のカーテンは半分開いたままである。